

フレデリックはねずみの詩人。フレデリックはなまけもの。みんながせっせと冬の食べ物をあつめているときも、フレデリックだけは別。でもフレデリックも働いていた。

「ぼくは、おひさまのひかりをあつめているのだよ。」

それからみどりのまきばの色や、ことばをフレデリックは集めていた。けれどもそれがなんの役にたつのか、他のねずみにはわからなかった。

ふゆがきて、ゆきが降りはじめた。

ねずみのかくれがには、最初はたくさんたべものがあった、みんなぬくぬくと楽しかったが、そのうちたべものも少なくなった。みんなが長い冬にあきてきた頃、さあフレデリックの出番だ。

「きみたちにお日様をあげよう。ほら、かんじるだろう もえるようなきんいろのひかり・・・」

ふしぎことに、みんなはだんだん暖かくなってきた。それから、フレデリックは、青いあさがおや、黄いろいむぎや、赤いけしや、のいちごの緑のはっぱのことや、それからぶたいの俳優のように、いろいろなことを話し始めた・・・。

レオ - レオニの話はどれも奥が深くて考えさせられる。それからどの絵本も異なったイスト材料と、方法で描かれている。「フレデリック」は抑えた色の切り紙のコラージュがすばらしい詩集のような絵本。

